

ライフ・イズ・ア・ムービー

望月 滋斗

誰かが言った。人生は映画である、と――。  
でもまさか、その中身が自分だけB級インド映画だなんて。

B級というだけあって、とにかく予算が足りていない。そのせいで生まれてこの方、身の回りはちやちなものばかりで溢れている。ひょいと身を投げただけで真ん中から二つに折れるベッドに、ハッと念を送るだけで粉々に割れる窓ガラス。なにより俺自身、会った次の日にはもう思い出せないような薄いエキストラ顔だ。

それでもって、ド派手なアクションシーンに見舞われることもない、低調な人生。

「おい、さっきからちゃんと聞いているのか」  
ふと我に返ると、俺は仕事でミスをして部長に怒られている最中だった。

「いい加減にしろよ！」

突然の怒鳴り声に、俺は思わず後ろにのけぞり、そのままの勢いでバク転を決める。  
聞こえはカッコいいが、これが厄介だ。

耳元で楽器の音が鳴る。エイヤー、エイヤーと始まる、インド映画特有の賑やかさを押し売りするようなあの忌まわしき音楽。意思とは裏腹に、俺の身体は音に合わせて勝手に激しく踊り出す。

同僚たちがキーボードを打つ手を止め、また始まったよ、といったような空気を漂わせる。俺だって始めたくないよ、とも言えず、陽気な笑みを顔に貼りつけたまま踊りつづける。

そう。俺の人生には、ときおりこうしてダンスシーンが挟まれるのだ。

ダンスシーンはTPOをわかまえることなく、いつだって訪れる。今、こうして部長に怒られているときだってもちろん、学生時代はよく授業中に、社会人になってからはよく通勤の満員電車の中で訪れるようになった。

そして、最も悩ましいのは意中の女性を目の前にしてのときだ。

なにやら、インド映画というのはラブシーンを避けてダンスシーンに置き換えるという文化があるらしく、キスはおろか、女性の手を一瞬间でも取ろうものなら、すかさずエイヤー、エイヤーと音楽が鳴るようになってきている。そのため、いい感じの雰囲気になどなるはずもなく、踊り終わった頃にはことごとくフラれてきた。果たして、俺の人生にヒロインが登場することはあるのだろうか。

気がつくのと、部長からの叱責も終わっていた。

同僚たちはふたたびパソコンに視線を戻し、おのおのの仕事に取りかかっていた。

そんな彼らを横目に、俺は肩を落としながら自分の席へと帰っていく。いいよな、みんなは普通の邦画なんだからさ。そこそこ予算もかかっていて、それなりに映画らしい起伏のある人生を送るのだろう。俺だって、山あり谷ありとまではいなくても、こんな風に悪目立

ちすることなくひっそりと暮らしていきたかったのに。

どうせこのまま、俺は緩やかにバッドエンドのときを迎えるんだろうな……。

半ば人生を諦めつつ、俺は部長に呼ばれては怒られ、踊ることを日々繰り返していた。ところが、脚本にはまだ仕掛けがあったらしい。

ある日、ステファニーという名の女性社員が派遣でうちの部署にやってきた。どこか北欧の血が混ざっているらしい彼女は、日本人離れした美しいルックスに甘えることもなく、テキパキとした仕事ぶりですぐに業績を上げ、社内では誰かとすれ違うたびにジョーク混じりの声をかけられるほどの超人気者となった。

もはや嫉妬にも及ばない、ハリウッド映画の人生。それも、アカデミー賞候補の。すると、俺の生活にも変化が起こった。

「君、ちょっといいかね」

「はい……」

いつものように部長に呼ばれ、怒られていると、あることに気がついた。

部長の声がよく耳に入ってこないのだ。正確には、その声が周りの音に溶け込み、背景と化しているような感覚だった。思えば、いつもなら仕事の手を止めてまで見てくるはずの同僚たちも、こちらに注目するそぶりを全く見せていない。あの音楽だって一向に流れ始めない。

とりあえずペコペコと頭を下げておきながら、俺は次第に合点する。

そうか、俺たちはエキストラになったんだ——。

それもそのはず、ステファニーの映る画角に入れば、誰もがセリフを失って当然だ。

これでもう悪目立ちせずにはすむ。鶏口牛後なんて嘘だ。B級インド映画の主役より、ハリウッド映画のエキストラの方がずっと幸せに決まっている。ようやく平穏な暮らしを獲得した俺は、これまた目立たないように小さくガッツポーズをした。

本来ならば、ステファニーに感謝を伝えたかった。ところが彼女と話してしまったら、せっかくならば、エキストラの地位が揺らぐかもしれないし、もしそのとき、「ナマステ」なんて言って手を合わせようものならまたあの音楽が鳴り出すかもしれない。俺は彼女の視界の端っこで、息を潜めることに努めるほかなかった。

しかし、脚本というのは実にいじわるだ。

というのも、なぜかここ最近になってステファニーと関わる機会が増えたのだ。偶然同じプロジェクトチームに配属されたり、二人きりで夜遅くまで残業を任せられたり。とうとう、俺は脇役としてわずかなセリフまでも獲得してしまった。

莫大な予算がかかっているだけあって、合成技術もお手のものだ。離れて仕事をしていたはずが、気がついたら、エレベーターの中でステファニーと二人きりであるなんてこともある。

「お疲れ様です」

そうして彼女に笑みを向けられると、どっくんどっくんと胸が躍り出す。そのビートに合わせて、今にも耳元でエイヤー、エイヤーと聞こえてきそうで冷や汗が止まらない。

そんなあるとき、ステファニーからこんな誘いを受けた。

「今夜、ダンスパーティーにこないかしら」

これぞまさにハリウッド映画！ 内心でそう興奮しかけるも、ふと冷静になる。

俺なんて、街中で踊っている方が似合うB級インド映画の出身だぞ。いつまたあの音楽が鳴り出すか分からない。そのときは、キレの良すぎる動きでパーティーをまるごと台無しにすることだってあるかもしれない。

俺は招待状を受け取りつつも、家に帰ってジツとしていることに決めた。

と、そのつもりでいたのだが……定刻を迎えるなり、なぜか俺は被っていた布団を取っ払って起き上がり、クローゼットを大きく開けると、こんなもっていたっけというような上品な衣装に着替え、会場へ向かっていたのだ。その動きは、まるであの音楽に合わせて踊るときのように制御できないものだった。

郊外に佇むボロアパートから駅に向かういつもの道中に、ライトアップされたダンスホールが忽然と現れた。CG技術だろうか。とにかくその巨大さに圧倒されてしまう。

中へ入ると、俺には似ても似つかない優雅なワルツが流れていた。中央のテーブルには金に輝くシャンパンタワーが天井近くまでそびえ立っており、またもその予算の大きさがうかがえる。

「来てくれたのね」

ドレスアップしたステファニーがこちらに駆け寄ってきて、俺はセリフを飛ばしたみたいに何も言えなくなる。このシーンを見るために劇場に足を運ぶファンも沢山いるのだろうな、と思うほどに今夜の彼女は際立って美しかった。

「さあ、一緒に踊りましょ」

彼女がこちらへ手を差し伸べてくる。その手を取りたい。しかし、そんなことをしようものなら、あの音楽が待ち受けている。今や脇役以上の、せつかくの彼女との関係もここで終わりだ。

気がつけば、俺は彼女の手を弾いていた。

「やっぱり僕は不釣り合いなのさ」

「……………」

俺のセリフに、彼女が透き通った涙をツーツとこぼす。

「どうして気づいてくれないの……私はただ、あなたと結ばれたいだけなのに。こんなこと言うのはおかしいかもしれないけど、たとえ、私が同じハリウッド映画を生きる華やかな男と結ばれたとして、その何が面白いっていうの？」

名シーンだ、と思った。今にも俺も泣き出してしまいそうになる。

身分違いの男女。禁断の恋。美女と野獣——。

そんな似た言葉の数々が、頭の中を駆け巡る。

俺はようやく目を覚ました。何も恐れる必要などなかったのだ。B級インド映画の男と、アカデミー賞候補のハリウッド映画の女が結ばれる。それこそが王道のストーリーじゃないか。

俺は彼女に向かって手を差し出す。涙を拭いた彼女がその手を取る。

途端に、流れていたワルツがエイヤー、エイヤーと切り替わった。俺は心からの笑みを浮かべ、ドカドカと足音を鳴らしながら激しく踊り出す。そして、いつしか彼女も、会場全体までもが同じ動きで一斉に踊り出した。

その晩、いや、それからの日々はダンスシーンでダイジェスト的に過ぎていった。

踊り終わった頃、俺とステファニーは結婚し、我が子も生まれていた。

「元気なハリウッド女優ですよ」

看護師がそう言った瞬間、俺はホッと胸を撫で下ろした。

今思えばB級インド映画も悪くはないけど、とはいえ、我が子にはできるだけ俺と同じ苦労はかけたくなかったのだ。

と、そのときだった——。

突然、病室のドアの向こうから爆発音がして、俺たち一家は瞬間に外へ飛ばされた。

土煙が舞う中、見上げると、病院全体が猛火に包まれていた。そばで我が子の泣き声が出て、それをステファニーが優しい声であやしている。

「よしよし、この子ったらオープンングからド迫力なんだから」

俺は立ち上がり、二人を抱きしめた。ひとまず、家族がみんな無事でよかった。

「しかし、予算があればいいってわけでもないのかもなあ」

そんなことを呟きながら、俺は我が子の煤けた黒い頬を拭って笑った。

今はただ、この子のハッピーエンドを願うばかりだ。